

を起こしたりした将校ばかり五十人ほどが一室に入れられ、作業もなく、毎日、碁や将棋、カルタに明け暮れていたが、しばらくして希望して屋外の土掘り作業に従事した。忘れもしない二十二年十月、突然列車に乗せられ、ナホトカに送られ、内地に送還された。時に十一月三日、明治節の日であった。

舞鶴より早速家に電話し、父母の健在を確かめた。敗戦、そしてシベリア生活まる二年。幸いにして五体満足で帰り得たことを感謝するとともに、亡き戦友たちのご冥福を心からお祈りする次第である。

シベリアでの食える物あさり

高知県 山本明司

昭和二十年十月二十日ころと思いますが、やっとこの汽車で日本へ帰れるとの希望に燃えて、数か月の疲れも重なり、文字どおりすし詰め貨車（十五トンの貨車の中に前後両方を二段に、自分たちの兵舎の古材でつく

り、その一段に何と十五人が詰め込み、その上それぞれが内地に帰れると思ひ、欲に集めた荷物もじゃまして、頭足交互で無理して横に重なり合うありさま）の中で、それなりにぐっすり寝込み、夜明けが近いか、大分冷えて来た時分、貨車は静かに止まった。

だれかが二階の天井近くの空気穴からのぞいて、これはいかん、北に走っている、ここはジンギスカンの駅だと悲憤な叫びに、一斉に目を覚まし、ざわめき立った。やがて伝令で大便をする者は汽車の下の方にせよ、汽車より離れてはいけないとのこと。小便は戸のすきまより外にたれ流してきたが、その点、男は便利と思つた。

また、一斉に大便のため外に出て見れば、先発隊が随分行つたと見え、地面はすきまのないほどうんこだらけ。それを見てうんこするのをやめる者も多く、我慢できぬ者はやむを得ない、広場で大勢の見る中で大便をしたことはなく、これぞ「出物腫れ物所きらわず」のたとえのとおりと思つた。

私たちの車両は大分後ろの方であつた。前の車両で便所をするため、物かげを探して汽車より離れたところ、

逃亡と見てか、銃殺されたとの話が飛んできた。

しばらくして貨車は動き出し、次の停車で朝食が出るであろうとうわさが流れてきた。やっと昼前に停車した駅で、長らく待っていたら、前方の炊事車に一貨車当たり水筒十個ぐらい持って、四人ぐらい飯上げに来るよう伝令され、受領して帰ったものは、何と一斗だる（味噌だるの古いの）にコーリアンのオジャが八分目ほど入った二たると、水筒に茶をもらって来た。そのかゆを飯盒の掛け盒に盛り分けてすすった。

全く少量で話にならず、かえって空腹感を増し、みんな愚痴たらたら、次は多くあがるであろうとの期待で我慢するほかなく、が次の日もまた次の日も同じこと、汽車はユックリズムで休みが長い。

窮すれば通すと、よくしたもので、毎日毎日通る飢えた捕虜列車に食物を売る満州人が駅に詰めかけ、私たちの停車するのを待っている。ギョウザ、パン、ジャガイモ、牛乳、焼豚、いろいろ買ってくれとせがむ。日本人の中にはたくさんのお金を持っている者もおり、高くてもいたし方なく、また宝身の差し替えで、寒い北に向

かっているのに、まだ北回りで日本へ帰れると思っ
るので、毛布、外套、服、チョッキ等、物々交換等
により食物を買って食う。

中には意地悪の満人がいて、我々は大便秘時以外外
リソ連兵が鍵をかけており出られないので、取引は天窓
よりで、片言の満語で交渉をして、飯盒などに紐をつけ
て金を入れつり下げると、金だけ取って逃げる者がいる
が、檻の中の我々は「コリヤー」と怒るだけ。ひどい仕
打ちに遭いながら数日たって着いた所が、トウレンスコ
エという、シベリア鉄道に満州里より出会った駅に降ろ
され、木材の貨車積み込み作業に当たった。

食事は時々黒パンがわずか出るときもあるが、相変わ
らず水粥がが。また作業は、日本人は全くなれていないの
に、おまけに道具のない力のみを頼りの作業に、ノルマ
と飢えと寒さ、十一月初めであるのに既に小川半分ぐら
い凍っていた。

そこには我々を収容する家がなく、雪がチラチラ降る
中、交替にたき火をして野宿をする。ここでの生活は、
都会の坊ちゃん育ちの方は見るも哀れだった。私は田舎

育ちだから、荷物を背負うに案々、一行二千人の中で一番ぐらい大きい荷物を持っており、貨車の中ではじやまになるとうとまれたものだった。

その荷物が食べ物と交換、夜は私の毛布を天幕がわりに小さな家をつくり、連れて行った兵軍属には外套の袖をはずし足にさし、持ち物衣類はすべてを分け合って身体に重ね着して、その上外套を着て、両手は肩より中に入れ、頭は防寒帽の上にリュックサックなどをかぶせて、足元をたき火で暖めて休ませた。

飢えと寒さと重労働にこたえて、身体はやせて髪はぼろぼろ。そんなとき、だからかジャガ芋の選別があるという話があり、行って見ると、ガランとした大きな建物にコルホーズやソフホーズでつくった馬鈴薯を選別した層が、土と一緒に残っていた。すきを見てそれを掘り出しに行ってみるが、ソ連人もジャガ芋は貴重品で、太い芋は残っていない。小指の先ぐらいのいよいよ層芋を土の中よりかき出して、飯盒で煮て食べた。

そんな日本人捕虜を見て、ソ連の民間人が、万年筆、鉛筆、ペンシル、時計、石けん、タオル、赤樺、風呂

敷、軍服、下着等を黒パン、馬鈴薯、ミルク等との交換が大流行、またしても私の荷物が役に立ち、十五名の戦友と分け合って食べた。

貨車が入って来る。たいがいの貨車は馬や石炭を輸送したと見え、石炭の粉と馬糞に交じって、馬がコーリヤンを食い落として踏みつけられ床にへばりついているのを、けずり取り、いつも持っている袋やポケットに入れ、時を見計らって手でさび分け、石炭をのけ、馬糞が黄色くまぶれ粉石炭も付着したものをガッシガッシと食うたもの。今でもあの時の渋いコーリヤンの味を思い出す。また残りは袋に入れ非常食とし、それでも食いたたい者には握り分けて食った。

次はチタの西方、ヤブロノイ駅より山に上り、自分たちで山小屋を建てて入り、丸木の床にある限りの衣服を着て、せり合って寝る。夜中に便所より帰って見ると、自分の場所に両側の人がせめて来てまともには入れぬありさま。食事分配には、夜は白樺の皮に火をつけて、その明りでパンを切り分け、スープを注ぎ分けた。高学歴の人の中に割に多くの心の腐った人がいて、自分の量を

多く取ろうとするものだから、トラブルが絶えなかつた。

正月前にヤブロノイ駅の積み込み要員として山を下りたが、そこはソ連の兵舎を改造して、粗末ながらペーチカもある古い建物だった。そのころ、入ソして二か月ぐらい経過していたわけだが、栄養失調と入浴をしないよごれた身体に猛威をふるって増え続けたシラミ。そのシラミが媒介する回帰熱のため死ぬ者、脳症を起こし故郷に帰りたいと父母を夢見て狂い死ぬ者、結核を併発する者が続出して、急遽兵舎を仮医務室に当てていた。

毎日三、四人、多い日は五、六人死んでゆく。それを木ぐろ積みにして集めて置いて、兵舎の裏山の古い野雪隠のくぼみの中の雪を除けて入れ、上に雪を被せる。とても土地は凍って一寸も掘れぬのでいたし方なく、春めていくるとそれを狼が食うので、ソ連に交渉して焼く。その焼き場で戦友の肉を食うたとの風評が立ち、複雑な思いをした。

糧秣倉庫の使役にはみんな進んで行き、被服の内側につけたポケットや小袋を股下にぶらさげており、大豆、

コーリヤン、粟、燕麦、取れるものは手当たりしだい袋に入れて取って来る。

ある日、軍属の一人が肉を引きちぎって口に入れたのがソ連の兵隊に見つかり、大きなビンタをもらった。その一打で肉が口からすっ飛び出て、おまけに歯が折れ、口唇は切れ、余りにも悲惨でむごい思いをしたことだった。

私も取って来た大豆を作業場でトタン板で炒り、食べているところを日本の小隊長に見つかり、私の分隊十五人が一週間絶食の鉄槌が下され喧嘩となったが、ソ連からは全員に量は分配されるので、私たちの分、他の分隊がたくさん食えるわけで、戦友は気の毒がりそっとパンの切れを残してくれたりして、三日程で解除となった。

そんなことも手伝って、ついに私も倒れ、入院し、次第に弱り、いよいよ今夜は死ぬると自他ともに認め、私の遺品と髪と爪を取りに来てくれた。私はその夜、毎日続く高熱のためやたらと水が飲みたくて、日本の衛生兵やソ連の監視員に交渉したが、水を飲むと下痢をするから汚いと言って、死にがけの水も飲ませてくれない。

もちろん、水も遠くから運んできた貴重品だ。私はどうしても我慢できず、どうせ死ぬのだ、ままよと監視の寝静まった夜中、魚だるの古いのにいれてある水タンクに忍び寄り、ふたの上に置いてある掛け盒に二杯飲んだ。

その水のうまかったこと、それまで生死の境地をさまよい、目を閉じると、故郷に帰り父母や氏神や秋祭の風景が見られ、目を明けると病室の天井が目につき、ああ、これはいけない、いまだソ連にいるのだと悲しみを繰り返していたが、水を飲んで、次第に苦しみも薄らぎ、生き返った。

私の両サイドの二人はその朝息を引き取り、水のやうに冷たく、骸骨に皮を着せたやうな姿となり、二人のシラミは私に移動して、私はその時のシラミの食跡がいまだ酒を飲むと首全体に残っている。

私ら生き残った患者とおの山の伐採作業隊の患者を集めて、四月ごろ、ヤブロノイより五キロほど山奥に、ドイツ人を収容していた丸太づくりの大きな家に移動し、ここがヤブロノイ地区の日本人の大きな病院とな

り、赤痢のときなど五百人も入院していた。

ついに私はその病院の責任者（支配人）になったが、二十年、二十一年は食糧事情は悪く、二十二年ごろより少しずつ改善されてきたが、病院を開設した二十一年夏は、歩ける者を連れてキノコをとって帰り、飯盒に詰め込み、岩塩で煮て、そればかり食った日もあり、アマドコロ（スズランの一種）の根を掘り、それを生のまますりつぶして食う。野ニラをとる、ワラビをとって食う、ゴムの樹液をとる要領で白樺の樹液をとって飲んだが、これにまた糖分が多く、助かった。

私は菜物の薬用炭、フクシン、リバノール、メチレンブリアウで絵具をつくり、筆もつくり、時を見て絵を描き、食糧と替えた。またソ連の関東軍の医薬戦利品を受領し、それを民間に持って行き、馬鈴薯や黒パンの交換材料とし、あらゆる苦勞を重ねて生きのびて来た。

次に食う物のたたりの話を三つ話すと、鹿児島兵隊で、馬鈴薯を夜、畠で掘り盗んでいるのを猟銃で撃たれ、臀部に散弾が十数個打ち込まれ、病院に入院して来て取り出したり、ソ連馬屋当番の日本兵が馬に下唇を食

いちぎられ、下顎まで肉が取られ、山の中の病院で移植もできず、外科の日本人の医者の手で両方をよせ合わせて縫合するのみで口の小さくなった方、見るも気の毒で内地へ帰ってやり直してほしいと慰めたことだったが、それを日本人の間では、馬の糧秣を取って食った罰と、憎まれ口をたたく者もおった。

糧秣倉庫の使役に行き、日本からの戦利品の中の海鼠の干物を食ったのが腸の中でふくらみ、腸捻転で入院して来、私たちも立ち会って手術をしたが、既に手遅れだった。小さく乾燥した数個の海鼠が腸の中で間隔をおいて大きくふくれ、ひどいものだった。

この方も心臓が右と、内臓が反対になっていた。シベリアで手術、またソ連軍医の研究用として数百人解剖したが、もう一人内臓の反対の方に出会った。すべて名前は見えていない。

冬は、比較的足腰の強い患者を引き連れて、狼、タヌキ、ウサギの尻を仕掛け、狼は何度かくくれたが、ワイヤーを食い切り血を落として逃げられたが、タヌキやウサギは随分多く取って食った。馬がビソとか恐ろしい病

気で死んでいるのを見つけると、ソ連人は近づかないが、我々捕虜はそれぞれの道具と袋を持って、臭い物にたかる糞バエかコンドルのように、アッと言うまに骨だけ残し取って行く。野犬や民家の犬を手なづけ、隠し持っている小さい紐で首を締め、殺して食った。

食い物のたたりほど恐ろしいものはないといわれるが、極限の中では（学問の程度や教養の有無や、普通にいわれる人格などは全く関係なく）人間の動物的本性がむき出しとなり、実にみにくい争いとなるが、人間の持つ非情さとともに、今思い出しても何だか寂しい感じもする。

しかし、このようにして食えるものなら何でも食べた人が、より多く生き延びられたということも間違いのない事実である。あのとき、私と一緒に腐った馬肉を食った某さんは今何をしているだろうと、当時を思い出しながら、筆を擱く。